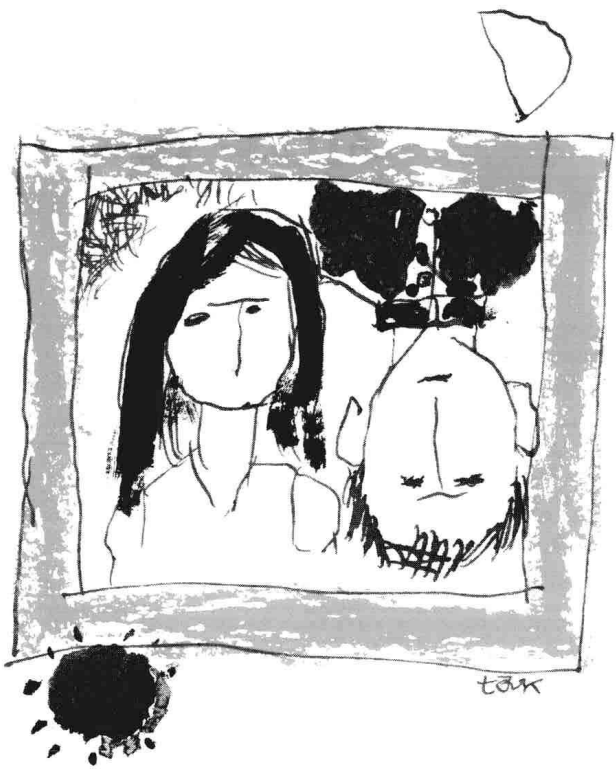
春のシュトルム

早船ちよ著　鈴木琢磨画

のシュトルム



春のシュトルム
一九七四年三月二〇日　第一刷発行
著　者　©早船ちよ
発行者　田辺　徹
印刷所　本文　大永舎
カバー　光陽印刷
製本所　東英製本
発行所　株式会社　草土文化
東京都千代田区五番町一〇—六
電話（二六四）〇六三一（代表）
振替　東京　四六一二二

もくじ

1 大きな森の白い少女……五
班ノート／叛ノート、ほか 28
2 揺れてる……三
霊媒がよんでいる 48
3 ピアノのけいこ……四九
カウンセラー室 79
4 関係のふかいもの……八三
5 小さな城で……九七
P子にカンパを！ 108
6 体験しなくても……一一
7 二ひきのちょうちょ……一三七
でた!! カベ新聞2号 144
8 人間のとりで……一四七
9 中学浪人……一六一
10 カンケイない……一七五

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

11 金魚のうんこ……一九九
中学生病について 207
12 奴にはヒゲが……二一一
13 金の四行詩……二三一
14 すっぱぬくとおもしろいよ……二三五
外国へ行きたくて 239
15 消えてしまえ……二四一
神々の死／生まれる 257
16 冷蔵庫をあけるネコ……二五九
あやまちに苦しむ 280
17 脱テスト・どほうもない自由……二六一
18 貝殻をくだけ……二〇三
19 わが道をゆく……三一
20 春のシュトルム……三七

大きな森の白い少女

いつもより早く、ぱっと目がさめた。中学二年生になって、はじめての登校日の朝である。

――クラブ、どうなるかな。

まっさきに、三郎は、それを考えた。

「つぶされてたまるか、新聞部を」

ベッドからとびおりる。すぐ、ガラス戸をあけて、ベランダへでる。

さっと、春風がきた。

「そよ風さん、おはようさんか」

『そよ風さん』は、のんきぼうずの三郎のニックネームだ。

さわやかなそよ風は、白い花びらを、二階のベランダまで、ひらひらとばして、吹きあげてくる。庭のさくらが散りはじめているのだ。

どこかで、オムレツをやいている甘い匂い。

三郎は、ベランダの上の花びらを拾って、三枚、ふっと吹きとばす。また拾って、ふうーっと、とばす。

花びらのとんでいく方向を目で追う。と、一軒おいてとなりの、その先、どぶを越えたB棟の窓に、クリームいろのレースのカーテンがゆれている。空家だったその窓のうちに、中学二年生になったばかりの（直感。だが、きっと、そうだ）彼女が、ベランダを見上げている。さきほどから、黒い大きな目をみはって、じいっと、こちらを見ていた……。もしも、ぼくのクラスへ転入してきたら（予感。きっとあたるさ）、さっそく、新聞クラブへさそうんだがな。

三郎は、ふいに、ぎくっとする。あわてて、自分のへやへ逃げこみながら、柱鏡を見る。一週間も洗ったことのない汚れたパジャマ姿ではないか。思わず、赤くなった。顔ばかりじゃない、からだじゅう、まっかっかに熱くなった。

レースのカーテンから、彼女の姿が透いてみえた。前髪は、額のところで切り下げているが、髪は、ジョン・バエズのように肩から上腕のあたりまでかぶさり、それは、背中いっぱいに豊かに波うっているようだった。

――なんてだらしなく、みっともないぼくだろう。パジャマのボタン、みんな、とれたままだ。

――ちくしょう、ちくしょう……何の恨みがあって、こんなみっともねえ奴が……。外へ出しゃ

ばりやがる――

ふっくらと下ぶくれのした彼女の頬や、やや厚めの下唇まで、はっきりと目に浮かぶ。

三郎は、ベッドの上で、でんぐり返しをし、弾みをつけて、天井板を、力をこめて、どんと蹴あげた。二段ベッドの上の段は、となりの部屋に所属している。

じだんだふんでも、取り返しがつきゃあしない。口惜しい。そこで、もうひとつ、でんぐり返しをし、力をこめて天井板を、どかんと、蹴あげる。

「こら、うるせえぞ、サブ」

二段ベッドの上から、二つ年上の兄きの次郎がどなった。だが、三郎はきこえないふりをする。

花村家では、長兄のXY放送芸能記者の太郎も、高校生の次郎も、動物社会学専攻・大学教授の父の卓造も、母の幸枝も、じぶんの洗たくものは、じぶんで洗うしきたりだ。家族のみんなは、それぞれ、じぶんのシーツでも毛布カバーも、下着も、くつしたも、人手をかりないで、適当に洗たく機へほうりこみ、さっぱりしたものを身につけている。パジャマは、むろんだ。それが家風だ。三郎だけ、調子がうまくいかないことがある。こんどときたら、最悪の状態で、ボタンがぜんぶ、ふっとんでしまっている。ボタンつけも、ママのせいにするわけにいかない。家庭科でちゃんと学習して、裁縫箱だって、専用のを持っているんだから。

――ちくしょう！　ボタンのやつ、なぜ、ちゃんとくっついてやがんないんだ。彼女は、だらしないかっこうのぼくを、じーいっと見てた……、なんてことだ。

またひとつ、力をこめて、どか、どかんと天井板を蹴あげる。

「こら、何の恨みがあって、あばれる」
いうよりはやく、次郎は上段ベッドからとびおり、ドアから廊下へ出て、となりの三郎のへやのドアを、ばんとあけて、とびこんできた。兄弟の二段ベッドは、たがいちがいに壁で仕切られているので、いったん廊下へ出なければ、となりのへやへは、はいれないのだ。
「こら、サブ！　やかましくて、目がさめちまったぞ」
――しまった。
三郎は、毛布を頭からかぶって、カメの子のように腹ばいになった。だまっていた。いつもなら、次郎は、母親から三度以上おこされないと、おきたためしがない。夜ふかしをするので、朝は瞼がくっついてしまって、起きられないのである。
「やい、へんじ、しないか。へんじを」
「……」
「知らんふりしようったって、おれ、承知しねえからな。ずうずうしいぞ」
後頭部へ、げんこつがとんだ。
「いたーい、あーん、痛いよう！」
「赤んぼうみたいな声をだすな」
「痛い、よっ！」
「ごめんといえ。そしたら、かんにんしてやる」
「……」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

「よし、だまっているなら、もうひとつ」
次郎は、はあっはっと息をはずませていたが、ぴしゃり！　頬へ平手打ちをくらわす。
「ひゃーっ、ひえーっ、痛い、痛い、キャーあ！」
三郎は、きいきい声で叫びたてる。
「なぜ、おれをたたき起こしたか、理由をいえっていってるんだよう……」
「……」
「いえぬか。いえぬなら、こうしてやる」
次郎は、おとなのようなすじばった、かたい腕に力をこめて、三郎の首すじをつかむ。
「おれを、なめるな。ばかにするな」
三郎の顔を、ぎゅうぎゅう、ごりごり、ベッドのシーツへ、手荒く、こすりつける。
階下の食堂で、母の幸枝の悲鳴がきこえる。
——とうさん、とうさん！　起きて。
——タロー、タローってば！　行ってやってよ、早く。
父と兄を、ゆすり起こしている。それを聞きつけながら、三郎は大声で……
「ぎゃおう！　ぎゃーっ！　く、苦しいよっ」
わざと、おおげさな泣声をあげる。どたどたと、階段をかけのぼる足音。
「ぎゃぎゃ、ぎゃーおう、し、死んじまうよーう」
バーンとドアがあいて、父の卓造がパジャマのまま、三郎と次郎のあいだへ、とびこんできた。

そして、次郎の肘で、下腹をおもいきり、こづかれてしまった。痛いにも、何にも、息の根が止まりそうで、ベッドの上へ、へなへなと、すわりこんでしまう。呼吸をととのえた後で、やっと、いった。

「また、朝っぱらから、けんかをはじめやがって、何だ」

顔をしかめながら、関東っ子の父の口は、荒っぽく乱暴だ。

「ジロ！　その手をはなせ。はなせったらはなさんか。サブは、なんて凄い声を出すんだ。ガチョウのしめ殺されるような声だぞ」

「だって、おれ。何もしないのに、こいつ……」

「何もしないのにとは、なんだ。こいつとは、なんだ」

「おれ、何もしない。しやしない。それなのに、いきなり、おれのへやへとびこんできて、たたいたり、押えつけたり……」

「ばか。なんで、ベッドの天井板を下から、ぼかすか蹴りあげた。サブが、さきに、あばれたじゃんかよう」

「おれ、ちっともあばれない」

三郎は、小さな声でいう。

「うそつけ！　人がいい気持ちでねていたのに。ゆうべ徹夜したんだぞ」

「うそいわない」

三郎は、長兄の太郎がドアのそばに立っているのを横目でみながら、憐れな声をふりしぼった。

「おれ、けっして何もしやしない」
「サブが、さきにあばれたんだ。蹴っぽったんだ」
「あばれない、蹴っぽらない、ちっとも」
「こいつ！　気狂い馬みたいに羽目板を……」
次郎は、いきなり、平手打ちをくらわそうとした。三郎が、はねおきたので、手もとが狂った。父親の横びんに、ぴしゃりと、したたかな奴を見舞ってしまう。
「あっ、ごめんなさい」
白髪まじりの横びんが、みるみる赤くなった。父は、頬をおさえて、ふるえ声でどなった。
「おまえらは、馬か、牛か。いったい、いくつになったんだ」
そこまでは、いつものきまり文句だ。
「きょうから、ふたりとも、中学と高校の二年生じゃないか」
次郎は、ぶるんと身ぶるいした。三郎の首すじを押えていた手から、すうーっと力がぬけた。三郎は、はねおきて、ベッドをおりた。次郎は、ぷいと、そっぽを向いたままだった。三郎は、こぶしを固めて、ボクサーのように腰をおとして身がまえながら、からかい面で「へっへっへへ、へへっ…」と嘲ってみせる。
――だれが、ジロちんなんか。けっしてあやまるもんか、だれが。
「へへへ……。おれ、中学二年生になったけどよ、ジロちんも高校二年生になったみたいだけど、へへへへ」

なったみたいのみたいにアクセントをつけて、ひょっとこみたいに唇をつきだす。
次郎が、さっと青ざめた。瞼を、ひくひくさせて口をひらいたが、声は、ことばになって出てこない。
そのとき、太郎がドアのそばから、つかつかとよってきて、三郎の首すじを、ぎゅうっとつかんで、つるしあげるようにした。
「こら、サブ！　ばかなことをいうと、おれが、承知しないぞ」
「ごめんなさい」
あやまりながら、太郎の胸に新品のテープ・レコーダーのぶら下がっているのを、「おや？」と、目にとめて見た。――これがそうか、チビのくせに、すごく性能のいいやつ。
「もう、バカなこと、いわんか」
「はい、いいません」
三郎は、いいすぎを後悔していた。
「ジロちんに、あやまれ」
「ごめんなさい。ジロにいさん」
次郎は、刺すような敵意の眼ざしで、じろりと三郎をにらんで、だまって、ドアを押して、のそっと出ていった。短くなったタオルのパジャマのズボンから毛脛が、にょきっと出ている。はだしの足は、父親や長兄より大きく、うしろ姿の骨格は、青年そのものだった。
――高校二年生みたい……みたいなんて、わるいこといってしまったな。いちばん意地わるを、

おれ、いっちゃったな。
階下のダイニング・キッチンで、幸枝のソプラノがよんでいる。
「男の子たち！　タロ、ジロ、サブ……そして、とうさん！　ごはんに、いらっしゃーい」

「そよ風さん」
うしろの席で、ユキが呼んでいる。
南中学校、二年Dクラス。一時間めの自習時間。正確にいえば、正規の授業時間を三十分くりあげての補習時間である。
「ねえ、サブ。そよ風さんったら！」
中学二年生になって、Dクラスは（A・B・C・E、それぞれのクラスも、むろん）、自主的に毎朝三十分の補習時間を持たされている。
クラス会で決議してきめたのだから「自主的」にちがいない。が、それと、「持たされて」ということばは、矛盾する。そういえば、テスト体制そのものが矛盾のかたまりなんだ。クラスのだれも、そんなアホらしいことを気にするものなんか一人もいない。
いや、『そよ風さん』の三郎は、そのぶん寝坊できなくなって、だから眠くて、ぼうっとしていて、とりとめのないことばかり、考えている。学習しようなんて気は、ちっとも、起こらない。
三郎は、ぼかーんとして、前の黒板に「学年いっせいテストは、あさって」と、ヌーボー先生の字でかいてあるのを見ながら、けさのけんかのことを考えている。

「そよ風さんたら」

——けさのけんか、ひさしぶりに、けんからしいけんかだった。がんばったな。

取っ組み合いなどして、定年退職まぎわのおやじを踏みつぶさなくてよかった、というもんだ。

黒板には、「テストまで、あと二日だ。全力をつくして、ねばろう、全力投球で、がんばろう」と、ヌーボー先生の右肩上がりの字が、勢いよく、ぴんぴん跳ねあがっている。

——お手やわらかに頼むよ。まだしばらくは、おまえらの面倒も見なきゃなんねえんだから……と、おやじは赤くなった頬をさすってたな。

三郎は、ドアを出ていきしなに、ふり向いた次郎の、突き刺すような憎悪の眼ざしが、気持ちにひっかかって、すっきりできないでいるのだった。

「そよ風さんたら、サブ！　呼んでるのに、ボケーッとして、どうしたのさ」

ユキは、鉛筆の尻で、こちょこちょと、セーターの背なかを突っつく。

——ベッドの天井を蹴っぽったのに、蹴っぽらないとごまかしたのは、たしかに、おれ悪かった。しかし……

ユキは、鉛筆の尻で、脇の下の近いところを突っつく。二度、三度……。くすぐったいけど、返事をしてやらない。

——ジロちんの怒りは、異常だった。そのうえ、おれは……

「サブ。花村三郎！　聞こえないの？」

——そのうえ、おれは、ひどいことをいってしまった。「高校二年生みたいだけど」と皮肉っ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com